資料：東京都教育庁指導部編　『昭和55年度　高等学校教育開発指導資料集（国語）』よりの抜粋　　（謡口明会員提供）

Ⅲ　「国語Ⅰ」における漢文の指導

1.　「漢文」指導の基本的な考え方と指導計画

従来から漢文の学習指導において，訓詁注釈に終始しないようにという反省が繰返されて来た。また「読みに始まって読みに終わる」という言葉を金科玉条として，ただ再読三読して，主題だけを皮相的に理解させるような傾向に対する批判も出されてきた。古典としての価値の高い，内容の豊かな漢詩文の作品を，もっと生徒にとって魅力あるものとして理解させ，学習意欲を高めさせる方法があるのでなかろうか。これまであまり体系的には顧みられなかった「表現・文体への関心を持たせる授業展開」について考えてみることなったのも，そうした必要感からである。

文章表現の簡潔さは漢文の特色であるが，（それはともすれば冗漫になりがちな現代国語の弊を是正するに有用な要素であるが）それぞれのジャンル・作者・作品によって，個性的な表現や文体があることに注目させたい。

例えば，詩においては，その簡潔性と音楽性，起承転結による表現の盛り上がりや，余情の妙，視覚的表現・聴覚的表現，また，時間的要素・空間的要素等に着目させたい。文章においては，簡潔な表現の中にもみられる叙述の展開の特色をとらえさせたり，適当な参考文を補助教材として肉付け的な理解を助けることも，今後，開発されるべき方法であろうと思われる。

中学校の漢文指導が，語句理解を中心にした読解指導にとどまるのに対して，高校の段階になったら，作品の生命にふれさせるためのより深く，より広い学習指導が，確立されなければならない。

年間指導計画

	主なねらい	教材例	指導項目と留意点
一学期（8時間）	○漢文入門 1.漢字文化の特質を学ぶ 2.訓読の基本を習得する	「照鏡見白髪」 「春望」 「格言と故事」	○国語の中の漢字を基に漢字の基本構造をまとめる ○訓読文体のもつリズム・語気と表現の簡潔性を学ぶ ○訓読に必要な最小限の知識を身につける 漢字の部首・形・音・義・熟語の構成・返り点（レ点，一・二点）・送りがな・読みがな・再読文字
二学期（6時間）	○長文読解 1.『史記』の表現と文体を味わう 2.中国人の思考法に触れる	『史記』 ―鴻門之会―	○細かい字句にとらわれず，長文を読み通す ○場面の展開に従い登場人物の心理を整理する ○『史記』の表現の特徴に留意する。（会話の表現の心理・俚諺の引用・首尾照応の叙述） ○司馬遷の史観・表現を通して中国人の物の見方，考え方を理解する

※　二学期配当時間は8時間，指導計画については「漢詩」「論語」の当該個所を参照。

2. 指　導　展　開

(1) 漢詩の指導

ア. 教材選定の観点

新教育課程における「国語Ⅰ」4単位のうち漢文学習にさきうる授業時間は，4時間程度であり，漢詩入門の意を含むことを考え合わせると，古体・今体すべての詩型を教えることは，不可能であり，絶句・律詩6首程度を指導することが限度であろう。

この制約の中で，教材を選ぶとなれば，「唐詩選」「唐詩三百首」を典拠とせざるを得ず，近体詩としての適格性，中学校における学習の重複等を考慮し，「国語Ⅰ」の特徴である，現代文と古文との関連性を考慮し，更に，絶句・律詩の四型式を網羅し，盛唐から晩唐に至る代表的詩人の作品を取り上げることを配慮して，教材を選定した。

イ. 指　導　案

(ア) 本単元の目標

a. 漢詩の詩体分類，近体詩における作詩規則（押韻・対句・平仄・詩句構成）修辞法，（畳韻，双声，畳字）の概要を理解させる。

b. 漢詩表現の簡潔性や韻律性を理解させる。

c. 漢詩表現における発想の展開（絶句における“起・承・転・結„ 律詩における“首・頷・頸・尾„），表現の飛躍を理解させる。

d. 詩人の思想や心情を理解させ，現代人と比較させる。

(イ) 指導の展開

時	本時の目標	学　習　活　動	表現・文体
第 1 時	○詩体分類を理解させる。 ○修辞法（語法）を理解させる。	○中学校時代に学習した漢詩をあげる。 ○近体詩の作詩規則で既知の事項を整理する。 ○先に提示された作品・作詩規則に必要事項を加え，詩体分類を整理する。 「鹿柴」　王維 ★発想の展開・表現の飛躍に配慮し，読解する。 ○王維・輞川荘・輞川集について解説する。 ○土岐善麿・佐藤春夫の和訳詩と比較する。 ・語法（畳韻・双声・畳字）について説明する。 ☆テープ等を用いて，訓読・詩吟・中国語による朗読を聞き，比較する。	○詩体分類 ○作詩規則 語数 句数 押韻 ○漢詩と和訳詩との比較 ○語法 畳韻 双声 畳字

第2時	○発想の展開・表現の飛躍を理解させる。 ○句法（五言句・七言句）を理解させる。 ○漢詩表現の簡潔性を理解させる。	「秋風引」　劉禹錫　★☆ ○藤原敏行の和歌と比較する。 「早発白帝城」　李白　★☆ ○李白・安史の乱・李白流罪の事情・経過を解説 ○一部を英訳と比較してみる。 ・鹿柴をも含め，漢詩表現と，それ以外の言語による韻文表現とを比較し，差異を考える。 ・五言句と七言句との句法の差異を比較する。	○漢詩と和歌，英文との表現の比較 ○句法 五言　二言十三言 七言　四言十三言 S・V・Oを使用 ○漢詩の構成 絶句　起承転結
第3時	○絶句・律詩の作詩規則を知り，作詩規則のもつ表現的役割を理解させる。 ○漢詩表現の視覚性を理解させる。	「山行」　杜牧　★☆ ・漢詩表現の持つ視覚性について説明する。 「旅夜書懐」　杜甫　★☆ ○杜甫・流浪・身後名について解説する。 ・作詩規則（平仄・粘・対句・押韻）のもつ表現的役割について説明する。	○漢詩の視覚性 ○作詩規則 対句 平仄 ○漢詩の構成 律詩　首領頸尾
第4時	○絶句・律詩の差異を理解させる。 ○近体詩のもつ韻律性（音楽性）を理解させる。	「八月十五日夜，禁中独直，対月懐元九」白居易 ○白居易・元稹の事跡・友情を解説する。　★☆ ・絶句・律詩の詩想の差異を説明する。 ・中国音による発音を手がかりに，平仄を理解させ，近体詩における韻律性（音楽性）を解説する。 ・詩句構成，作詩規則を一覧表にまとめる。	○絶句・律詩における詩想の差異 ○近体詩における韻律性（音楽性）

訓読・暗記については記入しなかったが，適宜行なうこととする。

★☆の記号は，それぞれ第1時における内容に対応し，各々の詩で行うことをしめす。

(ｳ) 指導内容

a．漢詩表現の簡潔性と視覚性

漢字の特徴は，一音節で発音される表意文字である，ということにつきる。これは，他の言語がイメージを結ぶのに，いくつかの文字を読み，音を聞くという時間的経過を必要とするのに対し，瞬時的にそれを可能としている。しかも，助字が少なく，文字の位置関係により示される文法構造は，表現形式を非常に簡潔なものとしている。また，杜牧「山行」のように，「霜葉」「二月華」という誰でも想起できる具体的事物を「紅」という色彩感覚で結び付けるという表現は，読者を視覚的イメージの世界へ誘いこみ，詩人の美意識を直截的に理解させずにお

かないのである。このように，日頃，抽象的かつ冗漫な文章をよしとする今日，漢詩表現の持つ簡潔性，視覚性は，ぜひ学ばならぬところである。

b．発想の飛躍と詩想

絶句における起・承・転・結の各句，律詩における首・領・頸・尾の各連は，各々独立しつつ，相互に関連しているため，各句・各連の間における発想の飛躍は非常に大きい。押韻は，詩文の内容と密接な関係を保ちつつ，一篇の詩をまとめている。このため詩人は詩を詠じるとき，韻の持つ響きを重視して，使用する韻を決定した。例えば，李白は「早発白帝城」の詩に，下平２７删の韻を使用している。この韻は「よろこび・やすらぎ」をあらわし，流罰が許され江陵へ帰る李白の心境を述べるにふさわしい。押韻の外にも韻律性は，絶句の承句・転句の飛躍を支え，律詩の各連毎のつながりを持たすために，対句は領・頸二連の遊離を抑えるために役立っている。

c．旅夜書懐　杜甫　の読解

細草　微風岸　危檣　独夜舟（下平１８尤）星垂　平野闊　月湧　大江流（下平１８尤）
名豈　文章著　官応　老病休（下平1.8尤）飄飄　何所以　天天地　一沙鷗（下平１９侯）
（押韻の下平声１８尤　１９侯は同用）

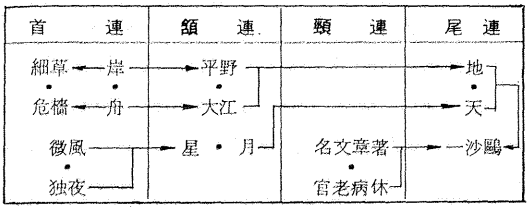
文体・表現の面から見ると，第７句に畳字『飄飄』が用いられている。畳字は，双声・畳韻とともに熟語作成の一方法であり，文字自体の意によるより，その韻律的感覚により状態を表現する語といえる。畳字『飄飄』は，音符『票』の意をうけ，物がひるがえるさま，さまようさまを表わしている。一句の構成を見ると五言は二言と三言とに分かれている。また，対句は，首・領・頸連に用いられている。

対句とは，普通の詩句が句を中心とした円形の意的世界を作り出すのに対し，対になる二句を焦点とする楕円形の意的世界を醸成し，平板なる叙述を盛り上げんと意図したものである。対句を構成する二句は，同一の文法構成，相反する韻律の響きを基盤にして，大小なる共通意識のうえに立ちつつも相反発する言語をもって構成したものである。すなわち，詩人が，形・音・義の鋭い均衡の上に，自からの言語美の世界を構築したものが対句である。例えば，この詩における対句を見ると，岸と岸にもやう舟は杜甫の身を貫く世界であり，細草・危檣はともに上方に向かって立つもの，星・月は天文的，平野・大江は地形的，動詞の垂・湧は上下，闊・流は水平の動きの概念として大いなる共通性を底にもちながらも，表面的意味においては相反している。また，頸連における，名・官，文章・老病は，そのまま対応する概念とは考えられないが，名文章著・官老病休となった時には，中国人の持つ伝統的思考として対応する概念

となる。

また，この詩の押韻には下平声１８尤が用いられている。この韻に属する文字に，尤（過也，甚也，怨也，多也，）憂（愁也）悠（遠也，遐也，憂右）愁（憂也，悲也，苦也）等があり，畳韻の熟語に「憂愁」等があるように，一首の詩を通ずる響きの中には，作者の「うれい，かなしみ，うらみ」の感情が流れている。

詩想の面から見ると作者の発想は，下図のように展開していったことがわかる。



→　発想の展開を示す。

・　対応する概念を示す。

起連において，自身の状態と卑近な情景の描写により詠み起された詩は，頷連に進むと，岸・舟に続く広大な風景の描写へと発展すると共に，自然のみを詠ずることにより，詩人の孤独をも暗示する。頸連に及び詩想は一気に盛り上がり，詩人の心境を吐露する。尾連は，首・頷連の内容を「天地」の語でうけとめ，頷連で暗示した詩人の孤独を「飄飄，天地一沙鷗」と明示し，頸連を「一沙鷗」の語でうけ，一首をまとめあげている。「一沙鷗」は「白鷗浩蕩に没す。万里誰か能く馴らさん」（奉贈　左丞二十二韻）の例もあるように杜甫自身の仮託である。自かからを鳥に託する例は古来より数多くあり，陶淵明は「帰鳥」「飲酒」の詩で官を退く身を，「翼翼たる帰鳥は，晨に林を去りぬ」「栖栖たる失群の鳥，日暮猶独り飛ぶ」と詠じている。

この詩の主題は，頸連にある。当時において第一級の知識人であった官僚は，一方においては第一級の文学者であった。中国人が求めた「不老不死」は，後に転化し「身後名」を求めるという意識となった。知識人は，官僚として名を残すことを第一と考えたが，その坐折に遭遇した時には，詩人として死後に名を残す事を希求した。この風は早くからあり，詩文のうちで否定的意見を吐く，陶淵明・李白でさえもその生涯の行動のうちに充分うかがえる。

生涯において官僚としての夢に破れ，漂白の旅を余儀なくされ，老いと病いとにむしばまれた杜甫は，この詩の他にも『万里悲秋　常に客となり，百年多病　独り台に登る』（登高）と述べ，『文章は底病を差（いや）す』（赴青城県出成都寄二小伊）と述べるように，漂泊・病・文章，の三者は，常に一体のものとして考えられていたのである。そして，この詩は，杜甫晩年における三つの思いを一首の詩の中に詠じたものといえるのである。

(2) 「論語」の指導

ア. 教材選定の観点と教材化例

(ア) 教材選定の観点

思想教材の持つ表現・文体に関心を持たせるためには，「礼記」「論語」「孟子」等の断片的な文章を列挙するのみでは，関心どころか，思想教材を学習することの意義さえ失なわれかねない。漢文の中でも，思想教材が難解なもの，取り組みにくいものとして，敬遠されがちな現状では，思想教材が身近かなものとして生徒に親しまれ，興味が持たれなければ，表現・文体への関心は生徒の側から起ってくるものではない。そこで，従来の教材選定の反省の上にたち，中国の思想の源流でもあり，基軸でもある「論語」の中から，弟子達との対話を通し，人間的な触れ合いの中で，思想を展開する章を教材として取り上げることにした。しかし，「論論」の短章とは異なり，対話を通じて理解させる教材は「国語Ⅰ」としては，やや難解であることを考慮し，生徒が学習に当たって読解に困難を覚えるであろう事柄に関しては，あらかじめ口語訳，注，参考事項等を読解のために教材化したものを準備し，読解への障害を取り除き，表現・文体への関心をもたせる方法が考えられる。「論語」は道徳訓を教条的に述べた書ではなく，生き生きとした，人間と人間との心のつながりを持ち，生徒に身近かなものとして感じさせるに適した教材であり，そこから叙述の展開に対する関心も，ひき起こすことができよう。更に「国語Ⅰ」において「論語」の表現・文体・叙述の展開にまで，興味・関心をもつ視点が養うことができれば，先秦諸子を含めた，他の思想教材についても，「論語」の発展として，生徒の自発的に取り組む視点が得られるであろう。

(イ) 教材化例

〔導入文〕 孔子は賢君を求めて諸国をさまよい，放浪する間に隠者と称して乱世を避けて，自分だけの生活を清く，充実して生きていこうとする人々と出合うことがあった。それらの人人は孔子が理想を求めていくことは無駄で，自己に忠実に生きていけばよいと主張し，孔子を批難した。だが，孔子は常にこの隠者のような態度を否定して，現実の社会に理想を実現するために積極的な情熱をもって行動した。けれど，孔子の晩年には，どんなに努力しても，賢君のいない，悪の横行している時世はどうすることもできない。そのような時のため息まじりの言葉が「海に浮ばん」であるが，孔子には依然として救世の情熱は燃えていたのである。

〔本文〕 子曰「道不行，乗桴浮于海。従我者其由与。」子路聞之，喜。子曰「由也好勇過我。無所取材。」（「論語」，公冶長篇）

〔直訳〕 孔子が言った。「道が行われない，いかだに乗って海に浮かぼう。私についてく

る者は由（子路の名）くらいのものかな。」子路はこの話しを聞いて喜んだ。孔子が言った。「由が勇敢なことの好きなのは私以上だ。いかだを組む材料さえ求めることができないのに。」

〔参考〕 子路は姓仲，名を由と言い，字を子路，季路とも言った。孔子より九才年少で弟子達の中では，最年長に属する弟子であった。剛勇を好み，[1]乱暴者であった。孔子の感化で次第に学問を愛好し，人間的にも成長したが，しばしば[2]軽はずみな行動や，うまれついての[3]蛮勇をふるい，孔子はいつも子路の[4]行く末を心配していたのである。

(1)「由也暴」（先進篇）武骨粗暴で，もの静かさがない。(2)「野哉由也」（子路篇）軽卒で礼儀をわきまえない。(3)「暴虎馮河，死而無悔者」（述而篇）虎を素手で打ったり，黄河のような大河を徒歩で渡ろうとしたり，死んでも後悔しないような者。(4)「若由也，不得其死然」（先進篇）子路のような男は畳の上では死ねまいな。

(ウ) 教材化の意義

従来の思想教材の指導は，生徒の学習能力もさることながら，通釈・語釈に終始し，思想内容の考察や，思想家の生活・行為・人格等を，ありありと再現させることが，ややもすれば等閑に付される傾向にあった。それは，思想教材の取り扱いが，各思想家の中心思想を理解するという，思想把握の方面にのみ関心が集中し，過去に生きた人間が現実に苦悩しながら思想形成をなし遂げていく過程を理解することが軽視されていたことにもよる。そこからは生徒の能動的な参与は期待できないであろうし，また，表現・文体への関心も望むことはできないであろう。教材化例に示した方法は，従来の単なる本文訓詁注釈に終始した授業の展開とは異なり，過去に生きた人間の内的必然の肉声を感じとらせる指導である。生徒に生きた人間の実像を把握しようとの意欲が起これば，叙述の展開にも興味を持ち，更に，言葉と言葉が緊密に関連し合う表現への関心へと発展していくはずである。表現・文体への興味・関心は，過去に生きた人間の実像把握と密接不離な関係にあることに留意すべきである。

イ．指　導　案

(ア) 本単元の目標

① 過去に生きた孔子が，弟子達との温かい人間交流の中で，思索を深め，理想実現のために生涯情熱を傾けたことを理解させる。

② 簡潔な表現形態に含まれた躍動する人間の感情・精神を理解させる。

③ 論語の文章に親しませ，特徴的な文体に留意させ，日常使用する言語と比較させ，言語についての関心をもたせる。

(イ) 指導の展開

時	本時の目標	学習活動	留意事項（文体・表現）
第1時	○孔子の生きた時代の背景と，弟子との人間的な触れ合いを理解させる。 ○教材Ⅰ＜「公冶長篇」―子路との対話＞の読解	○教材の導入文・参考の読解 ○論語本文と直訳文とを対比させ読解する。表現・文体の相違に留意させる。	○導入文によって孔子の人生の軌跡と真情を，参考によって子路の軽卒な性情を理解させる。 ○論語本文の簡潔な文体と，直訳に示した口語文体との相違を理解させ，表現上の特色・文体上の特徴を指摘させる。
第2時	○「公冶長篇」の叙述の展開を文脈に即しながら読解させ，文章を分析させ，表現・文体上の特色を理解させる。	○図例を用いながら，「道不行」の現状認識から，「無所取材」と子路への忠告へと展開する，心情の変化を中心に分析を行う。 ○一言一言の緊密な関係を理解する。	○表現上の特色 (1)四音連綴の効果的用法 「好勇過我」「無所取材」 (2)譬喩の効果的用法「無所取材」 (3)簡潔な表現　一字の凝縮表現 「由也喭」「参也魯」
第3時	○教材Ⅱ＜「陽貨篇」―子遊との対話＞の読解	○教材の導入文（孔子の政治実践の理想）を読解する。 ○論語本文と直訳文を対比させながら，図例を書せ，作業を通じて，表現・文体の相違に考える。	○季氏の専横を例に当時の政治状況の腐敗ぶりを解説し，子遊の実践が孔子の政治理想の忠実な実践であることを理解させる。 ○音数の連綴に留意させることにより，表現・文体の相違を理解させる。
第4時	○「陽貨篇」の叙述の展開を文脈に即しながら，内容を理解させ，分析させた本文を通じて，表現・文体上の特色を理解させる。	○孔子が子遊のいる武城を視察し「割鶏焉用牛刀」の譬喩を用いて賛辞を述べたのに，子遊が聞きちがえ，抗弁したため，意外な「前言戯之耳」の叙述の展開となったことを把握する。 ○対偶表現を通じ，修辞法の整理譬喩法などの表現法を理解する。	○表現上の特色 (1)対偶表現 君子学道則愛人・小人学道則易使 (2)二音・四音の連綴 夫子　莞爾而笑・割鶏焉用牛刀 (3)譬喩法 「割鶏焉用牛刀」

ウ．指導内容

(ア) 叙述の展開の図例

指導に当たって留意すべきことは，簡潔な表現で叙述が展開されているので，その叙述の展開を的確に把握することである。そのためには各会話の内容を細かく分析し，そこに表出された心情・感情を理解し，次に，細分化された文の表現上の特色や文体の特徴がどのように心情・感情と関連があるかを見極め，最終的に会話の内容を総合的に把握する指導がなされなければならない。その指導に有効な方法として図例が考えられる。教材に用いた二篇の図例を次に示す。

「公冶長」篇

本文	心情・感情	音数連綴
子曰　道不行	困難な現実に対する認識	3
乗桴浮於海	失望慨嘆・別天地への願望	(2・3)　5
従我者其由与	苦境をともにした子路への親近感	(3・3)　6
子路　聞之喜	子路の誤解・傲り	3
子曰，由也		2
好勇過我	子路の性格の欠点指摘	4
無所取材	子路を諫め，孔子の情熱の不変を示す。	4

「陽貨」篇

本文	心情・感情・状況		音数連綴
	孔子	子遊	
子之武城	弟子を訪問		4
聞弦歌之声	善政のありさまを察知する		5
夫子莞爾而笑	孔子の安心と満足感		(2・4)6
曰　割鶏焉用牛刀	子遊への賛辞	内容をとり違え誤解	(2・4)6
子遊対曰　昔者			2
偃也聞諸夫子		不満と抗議	(2・4)6
曰君子学道則愛人	常に主張している政治実践の基本的理念を弟子の口から述べられているのを内心喜ぶ	孔子の教えを例証に弁明	(4・3)7
小人学道則易使也			(4・3)7 1
子曰　二三子			3
偃之言是也	子遊の弁明の追認		(3・2)5
前言戯之耳	子遊に対する愛情・若い弟子達に基本的理念を理解させる。		(2・3)5

(イ) 論語に見られる表現上の特色

孔子は言語の伝達活動において，漢字の特質を巧みに用い，意志・思想の伝達を行っている。漢字は一音が一字であり，その一字によってひとつの哲学を述べることもでき，更にいくつかの語を連綴させることによって，音楽的な言語に仕上げることのできる特質をもっている。教材に即して，論語のさまざまな特色の中から，以下の三点に絞り，述べることとする。

① 簡潔な表現── 一字の効果的な用法

孔子は「巧言令色鮮矣仁」と述べ，簡潔な表現で伝達することに工夫を凝らした。象形文字である漢字は，具体的な物を象り文字としている関係上，伝達し易く，覚え易く，更に言外への含蓄ある表現となる特質を備えている。「由也喭」の「喭」は「粗暴」の他に「強い」の意味を持つ。聞き手の子路は「自省の念」と「自負の念」を交錯させながら，次第に孔子の真意を理解し，反省に努めるのである。孔子はこの一字の特質を考慮に入れ，多用するのである。

② 対偶表現と音数連綴

口ずさみ易く，記憶し易いための工夫として，孔子は，いろいろなリズム（音数）による連綴と対応表現の工夫をした。「君子学道則愛人，小人学道則易使」は（四・三）の音数連綴を用いた七言の対偶表現である。対偶表現は概念を対立させながら，複合の意味を連想させ，言外の含蓄ある内容へと発展させるための表現方法である。特に四言の対偶表現は，中国の最古の韻文である「詩経」・散文の「書経」の四言の表現方法と関連して，表現形態として安定した，リズミカルなものと考えられ表現技法に工夫が凝らされている。この対偶表現は修辞法の，互文法（不以物喜，不以己悲）・類句法（或生而知之，或学而知之，或困而知之，及其知之一也）・連鎖法（天時不如地利，地利不如人和）と類似の表現，あるいは同じ表現形態の範疇として考えられる。四六駢儷体・近体詩の律詩の対句は対偶の延長と見做すことができる。

③ 譬喩

孔子は意志・思想の伝達にあたって，抽象的・観念的な説明をせず，具体的・具象的なわかり易いものにしようとする意図があり，その意図のもとに譬喩を巧みに用いている。公冶長篇の「無所取材」陽貨篇の「割雞焉用牛刀」等は，孔子の言いたいことを直接表わさず，譬喩を用い，真意を自然に理解させようとの目的のために用いられている。この譬喩の活用は中国思想の特質の一つに挙げ得るものであり，孟子の譬喩の巧みさは，なかでも特筆に値するものがある。宋代の朱熹は「習，鳥数飛也」と「習」概念を具体的な「鳥数飛也」と譬喩を用いて，定義した。譬喩は上述の①②の表現上の特色と同様に，漢字のもつ伝達機能のなかの特質を生かした表現方法であると言えるのである。

Ⅳ　中学校国語教科書所収の古典教材

（昭和56年度　新学習指導要領準拠）

1.　古文教材一覧表

	三省堂	教育出版	学校図書	東京図籍	光村図書
一学年	「川　柳」 「平家物語」 ・敦盛の最期	「川柳・民話」 「今昔物語」 ・馬盗人	「狂　言」 ・雷 「沙石集」 「童歌・民謡」	「昔の童謡」 「竹取物語」 ・天の羽衣	「今昔物語」 ・阿蘇の史 「竹取物語」 ・蓬莱の玉の枝
二学年	「西鶴諸国　」 ・神鳴の病中 「今昔物語」 ・保昌と袴垂 「徒然草」 ・つれづれなるままに ・手のわろき人 ・友とするに ・丹波に出雲と	「平家物語」 ・敦盛の最期 「枕草子」 ・春はあけぼの ・うつくしきもの 「徒然草」 ・公世の二位の ・高名の木のぼり	「俳句（諧）」 ・芭蕉，蕪村他 「平家物語」 ・祇園精舎 ・敦盛の最期 「徒然草」 ・つれづれなるままに ・後徳大寺大臣	「徒然草」 ・つれづれなるままに ・公世の二位の ・仁和寺にある法師 「世間胸算用」 ・足切り八助 「平家物語」 ・宇治川の先陣	「平家物語」 ・扇の的 「徒然草」 ・神無月のころ ・名を聞くより ・猫また
三学年	「万葉・古今・新古今集」 ・短歌２１首 「枕草子」 ・春はあけぼの ・憎きもの ・うつくしきもの 「奥の細道」 ・月日は百代 ・やよひも末の ・三代の栄耀	「奥の細道」 ・月日は百代の ・三代の栄耀 ・山形領に 「万葉・古今・新古今集」 ・長歌２首 ・短歌１９首	「万葉・古今新古今集」 ・長歌１首 ・短歌１９首 「枕草子」 ・春はあけぼの ・うつくしき～ ・はしたなき～ 「おくの細道」 ・月日は百代の ・三代の栄耀 ・山形領に	「万葉・古今・新古今集」 ・長歌１首 ・短歌１０首 「枕草子」 ・春はあけぼの ・うつくしき～ 「奥の細道」 ・月日は百代の ・三代の栄耀	「万葉・古今・新古今集」 ・長歌１首 ・短歌１４首 「枕草子」 ・春はあけぼの ・うつくしきもの 「奥の細道」 ・月日は百代の ・三代の栄耀

○古典教材はほとんどの場合，現代語訳，または詳しい脚注・解説等が併記されている。

2. 漢文教材一覧表

	三省堂	教育出版	学校図書	東京書籍	光村図書
一学年	「故事成語」 ・歳月不待人 他 書原説 ・矛盾 現	「故事成語」 ・狐假虎威 現 ・蛇足 現書	〔参考〕 ・推敲 説	「故事成語」 ・矛盾 現書注	「故事成語」 ・蛇足 現書 ・矛盾 書注
二学年	「故事成語」 ・狐假虎威 現 ・苛政猛暴虎 書注	「論語」 ・学而時習之～ ・吾十有五而～ ・温故而知新～ ・学而不思～ ・徳不孤～ 書原現	〔参考〕 ・矛盾 ・五十歩百歩 ・塞翁馬 ・蛇足 ・朝三暮四 現	「故事成語」 ・塞翁馬 現	「漢詩」 ・絶句 杜甫 ・鹿柴 王維 ・贈汪倫 李白 ・桂林荘雑詠示諸生 書原説
三学年	「漢詩」 ・黄鶴楼送孟浩然之広陵 李白 書原説 ・静夜思 李白 ・春望 杜甫 ・絶句 杜甫 書原注	「漢詩」 ・春暁 孟浩然 ・黄鶴楼送孟浩然之広陵 李白 ・春望 杜甫 書原注	「漢詩」 ・春望 杜甫 ・静夜思 李白 ・送元二使安西 王維 書原現 ・格言三例 書	「漢詩」 ・黄鶴楼送孟浩然之広陵 李白 ・春望 杜甫 書原注	「論語」 ・学而時習之～ ・吾十有五而～ ・学而不思～ ・由誨女知之～ ・己所不欲勿～ 書原現

現現代語訳　書書き下し文　原原文　注脚注・頭注　説解説・説明文

3. 教科書所収古文・漢文教材頻数表

古文	平家物語 ⑤ 今昔物語 ③ 竹取物語 ② 沙石集 ① 雷（狂言）①	徒然草 ⑤ 枕草子 ⑤ 西鶴諸国咄① 世間胸算用① その他，民話等数例	万葉・古今・新古今集 ⑤ 奥の細道 ⑤ その他，川柳・狂歌・童謡等数例	漢詩と論語	春望 ④ 黄鶴楼送 ③ 静夜思 ② 絶句 ② 春暁・鹿柴・送元二使・贈汪倫	・桂林荘雑詠各① 学而時習之 ② 吾十有五而 ② 学而不思 ② 温故而知新 ① その他3章句